

2023年1月25日

稲葉延雄会長 就任記者会見 会見要旨



1. 冒頭あいさつ

(稲葉会長)

本日付けでNHK会長に就任した稲葉です。改めて、どうぞよろしくお願いいたします。

NHKがよって立つ放送法の第1条には、放送の目的として、放送の効用を国民にあまねく普及し、表現の自由を確保し、健全な民主主義の発達に資するということがうたわれています。

放送法は、私が生まれた昭和25年にできた法律ということもあって親近感を感じるとともに、放送を通じて戦後の日本社会をより良いものにしようという、当時の立法関係者の熱意を感じ感銘を受けた記憶があります。今回NHKの会長をお引き受けするにあたって不思議なご縁を感じるとともに、こうした志の高い仕事に関わっていかれることを大変名誉に感じています。

前田前会長がこれまで取り組まれてきた改革に関しては、業務の効率化を大胆に進めることで、受信料値下げに伴う収入の減少を収支均衡に持っていく道筋について、おおむねメドをつけていただいたものと理解しています。この先、想定通りに財務の計数が現れてくるかどうか、しっかり見極めながら、この秋の受信料値下げを実現していきたいと思っています。

そのうえで、私の役割は「改革の検証と発展」です。実際かなり大胆な改革ですので、若干のほころびやマイナス面が生じている部分があるかもしれません。従って第一に、もしそうであれば、丁寧に手当てをしながら、ベストな姿に持っていきたいと思います。

特に人材活用の見地から重要な人事制度改革については私の目から見て検証、見直しを行っていきたいと思います。一人一人が能力を最大限発揮してもらうために、多様なキャリアパスを示して安心して職務に専念できるよう温かみのある人事制度にしたいと考えています。そして、その際には、現場の職員・社員のみなさんの声に耳を傾けて、しっかり対話しながら手当てを進めていきます。

そして第二に、収支の均衡が表面的に実現したとしても、それによってコンテンツの質や量が落ち込むことがあっては本末転倒です。デジタル技術を活用して質・量ともに豊富に提供していく。これはやり残した部分であり、経営改革の第二弾、本丸として探っていきたいと思います。

デジタルテクノロジーのさらなる活用としては、例えばメタバース技術の活用による新しい画像表現の探求やデジタルアーカイブの事業展開、あるいは番組の制作から発信までの生産プロセス、職人芸的なものを否定するわけではありませんが、そうした生産プロセスをデジタル的に抜本改革することなどで、これまで以上に高品質なコンテンツを効率的なコストで生み出していけるよう、NHKを前進させていきたいと思えます。

最後にNHKとしての思いを申し上げます。まず日々の報道面では、真実の探求のため時間をかけてもしっかり取材し、NHKらしい真摯な姿勢で、公正公平で確かな情報を間断なくお届けしたいと思えます。多様な情報が錯綜する中で、皆様の日々の判断のよりどころになりたいと念じております。

また、エンターテインメントの制作面では、さまざまな新しい試みに挑戦しながら、世界に通用する質の高い番組の提供を心掛けます。皆様の日常がより豊かで文化的なものとなるよう精一杯努力したいと思えます。ちょうどよい機会ですので、これらの点を改めて皆様にお約束したいと思えます。

私からは以上です。

2. 質疑応答

(記者)就任が決まってから約1か月半経った今の心境と、家族を含めた周囲の反応は。

就任が決まってから1か月半ほど経ちまして、その間NHKの幅広い業務内容についてレク(説明)を受けました。これまでの時間を大変長く感じました。うっかり過ごしていると時間というのは矢のように飛んでいってしまいますが、やはり相当充実していた毎日だったなど今思っています。周囲からは、「大変ですね」というようなお声、激励をいただいています。引き続きこれからも、多分忙しくて充実した日々になるのだろうと思えますが、NHKの発展に力を尽くしていきたいなという気持ちです。

(記者)本日、民放連の会見があり、遠藤会長から稲葉新会長の就任について「前田前会長が手がけた改革路線を引き継ぎ、新たなリーダーシップのもとでNHKの改革を進めていただきたい。また、改革の手直しなどについてもどういったことを示されているのか、早い機会にお目にかかって伺いたい」という発言があった。どう受け止めるか。

民放との連携は、大変重要です。放送を通じて多様な情報や番組を全国にお届けするわけですが、その際、民放との二元体制は今後もしっかり堅持していく必要があると考えています。デジタル時代においても、民放とNHKが知恵を出しながら協力できることは協力するという一方で、ともに社会に貢献していくべきだと考えています。

改革について、私の役割はまさに、改革の検証と発展だと考えていまして、それこそが改革を引き継いでいくことだろうと思っています。色々なご意見等があることは承知していますが、現場の声によく耳を傾けて、必要があれば手直しし、ベストな姿を見つけていきたいというのは先ほど申したとおりです。遠藤会長とお話する機会があったら、そういった内容をお話することになると思います。

(記者)これまで日銀、それからリコーと、どちらかと言うと取材を受ける立場だったと思うが、これからは1万人が働くNHKという組織を引っ張っていく立場かと思う。NHKという組織を外からどのようにみていたか。

おっしゃる通り、私は外にいた時は取材を受ける立場でしたので、そういう意味でNHKを見ていたのですが、冒頭にも申し上げましたように、日銀時代に放送法を勉強するチャンスがあり、そこで放送法の1条を承知していました。その放送法1条がうたっている内容に非常に感銘を受けまして、「そういう組織があるんだ」と受け止めていました。

(記者)これまで日銀、リコーと立場が変わる中で、難しい仕事にも数々向き合ってきたのではないかと。自身の性格を、どのように分析しているか、何かエピソードなどがあれば、合わせて聞かせてほしい。

自慢めいて申し上げることはないのですが、ご質問の趣旨を、例えば難しい仕事に取り組もうとしたとき、どんな心持ちでやるのかということと解釈して、それにお答えするとすれば、かつて将棋の羽生さんと立ち話をするチャンスがあって、「対局中に羽生さんは全く新しい手、戦略を思いついて勝ったことがどのぐらいあるんですか」と聞いたことがあります。

そうしたら、答えが予想外だったのですが、「いや、全くないです」と。羽生さん自身が対局中、「これは全く新しい手だ」と思って打って勝った例でも、後から見ると先人がもう考えついていることだらけだったとおっしゃったのです。これはある意味、私のこれまでの体験に通ずるところがあります。

難しい問題があるということは、今まで先人たちがいろいろ解決策を考えても、実現、解決できなかったものが、山のように積み上がっているわけです。

でも時代が変わって、時の歯車がカチャッと動くと、その瞬間に、今まで解決策にはならなかったようなアイデアが、突然ソリューションとして使えるようになることがあるのですね。私は難しい問題にあたった時に、先人がいろいろ考えていたアイデアのうち、どれが使えるようになるだろうかと探すことで、それをある種のモチベーションにして、その難しい問題の解決を図ってきました。自分で新しい解決策を見つけるのはなかなか難しいですが、先人たちの知恵を上手く借りながら、それを現段階で当てはめてみる。そういうものが結局、イノベーションというものかなと思ったりしています。

(記者)先日の会見で話していた、「ダーウィンが来た！」が好きだという6歳のお孫さんに、新しいNHKでの仕事について、話す機会はあったか。

いや、あまりないです。この間、ニュースに私の顔が出たときに私だと分かったようで、それはそれでいいのですが、取り立ててそこからは深い話はしていません。

(記者)インターネット業務の位置づけについて、どう考えているか。今後、どう進めていこうと考えているか。

ご案内の通り、現在の放送法ではNHKのインターネットの活用業務は、(放送の)補完という位置づけになっていて、実際そういう位置づけで業務が行われていると承知しています。一方で、放送と通信の融合は進んでいますし、海外と比べると、現在の放送法が、あるいは社会の現状とずれているという面があるのかもしれないと思います。

インターネット活用業務の位置づけなどを含めて、さまざまな検討がされていると思うのですが、特に総務省の検討会、作業部会等で本当に突っ込んだ議論を是非して頂きたいと思いますし、その動きを注視していきたいと思っています。

(記者)政権との距離について伺いたい。今回多くの社が、会長選出時に岸田首相側の意向が働いたと報じている。選出前に、首相側からそういった打診があったのか。

私にそういう動きがあったかということですか。それはないです。

(記者)NHKには、これまでも政治からの圧力があったと指摘されている事例がある。NHK会長として今後政権とどう向き合っていくのか。

冒頭で申しましたように、NHKは放送法に基づいて運営されていて、その放送法では「自主自律、公平公正な立場を堅持して、それで何人からも干渉されない、そういう対応していくべきだ」とうたわれていますし、そのように行動すべきだと、本当に思っています。

報道機関として自主的な編集判断に基づいて、不偏不党の立場から行動していくわけですが、できるだけ真実を掘り下げて、その真実を見つけ出す努力をするということは不可欠ですし、それでも真実が見つからないという場合には、いろんな見方が多様にあるはずですので、それを等しく取り上げて皆様にお伝えする。そういう姿勢を維持していけば、それは結果として不偏不党の報道姿勢になると思っています。

(記者)所感の中で、前田前会長の改革の検証と発展について述べていたが、検証のやり方や今後のスケジュール感について聞きたい。

今の中期経営計画は2023年度まで(のもの)です。次期計画(の期間)はその先ですが、計画を立てる作業は23年度に始めなければいけない。多分、その中身というのは、改革を実施してきた中で、どの部分が足りないのか、どの部分が何か歪んでいるのか、そういった点検作業をした上で、中期経営計画の策定作業に入っていると思いますので、できるだけその前に検証をしていかなければいけないと思っています。

具体的にどうやるかというのは、これまで改革してきたスタッフに相談しますが、できるだけ早くその辺をチェックして、残った課題を新しい中期経営計画の中に盛り込みながら解決していくことになると思います。

(記者)次期中期経営計画を策定する前段として、その点検をするということか。

そうです。流れとしては。

(記者)コンテンツ、番組の質と量をさらに充実させていくということだが、会長が考える質の高い番組とはどういうものか。

もっとも抽象的で、私はある種の数値とか、そういうことでは示し得ないことだと思います。ただ、いろいろ視聴者のご意見などを伺いながら、実感として皆さんの生活の面でコンテンツ、プログラムを見たら豊かな気持ちになったとか、新しい事実を知ることができて賢くなったとか、あるいはより文化的な生活になったとか、そういう実感を持ってもらえるようなコンテンツ作りに励みたいと。

その結果、例えば世界のコンクールとかで、いい番組だと言われれば、それはそれでいいんですけども。やっぱり何よりもNHKの視聴者の生活が豊かになったなというふうに関心していただけることが一番大事だと思います。

(記者)年末年始はどのような番組を見たか。

年末といえば、やはり紅白歌合戦を見ました。LOVE & PEACE というテーマで、出演者の皆さんそれぞれが素晴らしいパフォーマンスを示していただいた。後半のほうに入って、私の好きな加山雄三さんが出てきたりして、楽しく聴くことができました。今回、会長に決まって、いろんなところに挨拶に回っていますが、その際、「今年の紅白は楽しかった」という声を聞きました。

コロナでこの3年間ぐらいお子さんの家族と一緒に会って紅白を見てこなかった。今回はそれが見られたのでよかった、と言うんですね。前半の若い人たちの音楽も、お孫さんとか娘さんが歌ったり踊ったりするので、それを見るのも楽しかったし、後半のベテランの歌手の方を見るのも、自分たちの若い時のことを思い出して楽しかったと。本当に紅白の楽しみ方はいろいろある、年末の風物詩の中に溶け込んでいるんだな、と感じました。

それから年始は、元日の夜7時からEテレでやっているウィーンフィルのニューイヤーコンサートを私は毎年見えています。これはオーストリアが全世界に向かって、ライブで放送するわけですが、中身はいつもウィーンのワルツと、それに関連するバレエということで、全くプログラミングの代わり映えはないのですが、全世界の人があれを聴いて、「年が変わった、さあ新しい年だ」という気持ちで番組を見ているんだと思います。番組の在り方というのは、いろいろあるなと思われる、そういう番組でした。

(記者)NHKの会長として、紅白に期待することは。

紅白は長い歴史もあるし、毎年工夫を重ねてきていると思います。今年も多くの方に楽しんでいただく内容になっていると思いますし、いろんな世代の人たちが聴いて楽しむ番組ですので、そういうことを念頭に置きながら、新たな工夫をしてもらうことを期待しています。

(記者)会長就任の打診の際に、初めて話をしたのは経営委員か。

森下経営委員長からお話があり、12月5日に来て欲しいという話でした。

(記者)就任前に、経営委員長以外から会長について話はしていないということか。

それはないです。

(記者)ネット活用業務について先ほど補完であるが、現状に少し遅れているのではないかという話もあったが、どのようにしていきたいか。

NHKは民業圧迫とならないように留意しながら、業務をやっていかなければいけないと思っています。したがって現状、補完業務だと規定されておりますので、まさにそのとおりにやってかないといけないと思っています。

ただ、世の中は少しずつ変わってきていて、放送と通信の融合は、どんどん進むであろうし、そういう状況に照らしてみると、放送法での定めが社会の現状と合わなくなってきている面もあるいは出てきているのではないかと考えています。その辺は総務省の検討委員会とか作業部会では、よく議論をしていただきたいと本当に強く思います。そこでの結論に従っていきたいというふうに思っています。

(記者)NHKが目指す近い将来像を示さないと、議論がきちんと前に進まない印象も受けている。近く将来像を示す考えはないか。

ここはなかなか難しいところですよ。かえってNHKがそういうことを言い出して議論が混乱するということがありますし。その利用の実態とか、そういうものを細かくご報告するとか、そういうご議論に役立つことについては、引き続きNHKの見解というものを述べていきたいと思いますが、直截に何をやりたいのかとか、これをやりたいのかということをお先に述べると、かえって議論を混乱させるということになる。作業部会とか、そういうところの議論を通じてNHKの補完の在り方について、具体化していくということがよろしいのではないかと思いますね。

(記者)受信料値下げで6000億円ぐらいの予算規模になっていくが、その後のNHKは、その規模で進むのか、それともさらに筋肉質な形にしていくのか、どう見通しているか。

その辺は相当先の方になるので、なかなか分かりにくいんですけども、少なくとも先ほど申しましたように、今回の受信料の値下げによる収入の減少に見合った収支計画の策定はまだこれから若干年かかるわけですけど、そこについては、おおむね目途がつけられていると。それゆえ受信料値下げを実行させていただくということになっているわけです。

しかし、そうは言っても、実際の財務面の数字が収入であれ、支出であれ、想定したとおりに出てくるかどうかは、まだ始まってもなく分らないところなので、よくよくここはウォッチ、トレースしながら、とりあえずはこの秋の受信料値下げを実現していきたいと。まずはその点を見極めるということだと思います。

(記者)大河ドラマ「どうする家康」を見て、感想や自分に重ね合わせることなどはあるか。

番組制作面では、今回はいろいろ技術が進歩する中で、随分新しい技術を活用しているのだろうというのが想像できて非常に興味深いです。私の人生に照らしてどうのこうのというよりは、使われている技術というのは非常に興味深いです。これからも多分、技術面で新しい試みが出てくるのだろうと思いますので、それを楽しみにしています。

ご当地である愛知、静岡でも大変よく見られていて期待も大きいということですが、私自身も静岡出身ですので、「鎌倉殿の13人」に続いて今年もゆかりのある土地が舞台で、2年連続楽しませてもらっています。本当にありがたいことだと思っています。

(記者)日銀とNHKの似ているところ、似ていないところは。

組織がまったく違うので、僕は比較したこともありません。やっぱりNHKはNHKで、自主独立で不偏不党、誤りのない情報を提供することによって、皆様方の信頼あるいは必要とされる存在であり続けたいということだと思います。一方、中央銀行の方は政府から独立して、自分の思う金融政策を実施して経済社会を安定させるということで、全く違うと思いますので、比較するのはあまり適当ではないのではないのでしょうか。

(記者)ちなみに会見は好きか。

好きな人がいたら教えてほしいと思いますけれど。でも、こういうところでないと、きちんと考えていること、思っていることをお示しできないので、こういう会見は大事な場だと思っています。

(記者)4月から導入される割増金について、会長の率直な受け止め、意見は。

割増金については、受信料の公平性を確保するという見地から導入されたと思っています。もちろん割増金制度が導入されても、受信料契約の締結あるいは受信料のお支払いについて、NHKの活動の様子とか受信料制度の意義をしっかりと理解いただいて納得していただく、それで手続きやお支払いをしていただくNHKの方針には全く変わりはありません。

また割増金についても、一律に条件に該当するからといって請求するというのではなく、お客様の個別の事情を総合的に勘案しながら運用していくという姿勢にあると聞いております。

(以上)